



「昨年六月から行なわれていた国の「自然環境保全調査」の結果が、一月五日に環境庁から発表された。「緑の国勢調査」といわれるもので、人間の手が加えられている程度に応じて自然を格付けし、その分布を明らかにしたものである。これによると、北海道が、植生自然度の比率の高い「10」、「9」に相当する地域の占める割合がもっとも高く、六一・七%に及んでいるが、反対に、

東京、大阪、神奈川など太平洋ベルト地帯は、自然度「1」の比率がきわめて高く、自然の破壊がもっとも進行している地域である。こんどの調査は自然度を数量化して、かなり正確に全国の自然度の分布を明らかにしている。

さて、この調査によって未開発のところももっとも多く残っている地域、すなわち自然度のもっとも高い地域が北海道であることが明らかになった。今後の北海道の「自然環境保全」については、どういう政策が適切であるか。これには相反する二つの方針が考えられるであろう。一つは、他の地域に比べて北海道はまだ自然度が高いから、もっともっとも開発されてよいという、開発に重きをおく政策と、わが国はすでに開発されすぎているから、「自然環境保全」を強調すべきであり、北海道の占める位置は重要であるから、北海道の残された自然林や草原などは、これ以上開発すべきではないという政策である。

わたくしが北海道の山岳に親しんだのは、北大に入学した大正十一年からであるから、およそ五十年にわたって北海道の森林の変貌を見てきた。たとえば、昭和の初期には、十勝の大樹附近には、うっそうとしたカシワの巨木の自然林が残っていた。帯広から大樹に通ずるバス道路は、その森林帯を縦貫していた。いまではどこにもあのような自然林は見られないが、いまから思うと、あの森林は、学術的にも、森林景観の見本としても、相当の広さを保存しておくべきであった。

人類の文化の発展は、ある意味で森林の伐採と不離一体であったが、工業の高度に発達した現代となると、一国の文化の質的評価は、森林の保全度に比例するといってもよいであろう。道内の森林のこれ以上の伐採は一切認めないというのも極端であるが、一般的には、森林の保全と育成を優先させ、伐採計画を先行させることのないよう、節度のある行政が望ましい。

(会長)

北海道の森林保全

伊藤秀五郎